

ワークショップ「江戸時代における 藩札の流通実態」の様相

はじめに

日本銀行金融研究所では、1996年9月4日、経済史・貨幣史の専門家を招いて、「江戸時代における藩札の流通実態」と題するワークショップを以下の要領で開催した（座長は石井寛治金融研究所顧問（東京大学教授））。

（貨幣に関するワークショップの概要）

金融研究所報告：「委託研究からみた藩札の流通実態」

	日本銀行金融研究所調査役	鹿野 嘉昭
指定討論者からのコメント：	松山大学教授	岩橋 勝
	大阪大学教授	宮本 又郎
	法政大学教授	鷺見 誠良
リジョインダーおよび討議：	千葉商科大学教授	齊藤 壽彦
	慶應義塾大学教授	田代 和生
	東京大学教授	伊藤 正直

今回のワークショップは、1995年12月に開催された金融研究会「貨幣学（Numismatics）の方向を探る」において日本銀行金融研究所が今後の研究課題のひとつとして掲げた江戸時代の通貨制度のあり方と機能について、藩札の流通実態に関する検討を通じて幅広く議論することを目的として開催された。藩札に関しては、戦前期より数多くの研究が公表されているが、日本銀行金融研究所でも、山口和雄東京大学名誉教授による指導のもと、藩札の流通実態についての理解をさらに深めることを目的として、これまでの間、地方在住の貨幣・金融史研究家に全国諸藩の藩札の流通実態に関する研究を委託してきた。

今回のワークショップでは、こうした委託研究から得られた研究成果をとりまとめた金融研究所報告をもとにして、江戸時代における藩札の流通実態や江戸期幣制における藩札の意義と役割などについて活発な議論が展開された。すなわち、金融研究所からは、鹿野が、報告論文「委託研究からみた藩札の流通実態」（本号収録）

に即して藩札の性格、特徴と変遷などを簡単に振り返った後、委託研究での成果をとりまとめるかたちで、江戸時代における藩札の流通実態について以下のような趣旨の報告を行った。

第1に、藩札の流通に関しては、これまでの間、「大部分の藩札は幕末にかけて濫発によって価値が大きく下落するとともに、兌換停止に追い込まれるなど、領民生活に悪影響を及ぼした」という見解が通説として支持されていたが、藩札の流通事例には、各藩のおかれていたその時々々の経済環境や藩当局の財政運営態度の相違などを背景として多種多様なものがある。第2に、藩札が円滑に流通するうえで最も重要なのは、藩札の貨幣としての一般受容性に対する領民からの信頼であり、そのため各藩とも、十分な兌換準備確保のほか、有力商人の信用を利用するなど、できうる限りの方策を用いて藩札の価値維持に腐心していた。第3に、地方貨幣としての藩札が継続的に発行されるなかで、藩札は士民生活のなかに定着し、利便性の高い交換手段として広く利用され、またそうであるがゆえに、藩札価値の下落が見込まれる場合には、札騒動が発生したと考えられる。

指定討論者をお願いした岩橋勝松山大学教授、宮本又郎大阪大学教授、靄見誠良法政大学教授は、金融研究所からの報告に対し、「委託研究報告などから得られた各地の藩札流通実態を時代別に比較検討のうえ、藩札の多様な流通実態を明らかにするとともに、その貨幣としての一般受容性を保持すべく藩政府が種々腐心していたことを詳細に論じた点で意義がある」と評価した後、①藩札の発行理由、②幕府の貨幣高権と藩札発行との関係、③藩札流通の背景、④国際比較からみた藩札の日本的特徴など、江戸期幣制における藩札の性格、役割と経済史的意義をめぐってさまざまな意見を披露された。なお、ワークショップ会場において、当研究所が保有している越前福井藩札や尾張名古屋藩米札などの藩札を臨時に展示した。

本稿は、多岐にわたったワークショップでのコメントおよび議論を整理・要約するとともに、今後の藩札等の研究に関し残された課題を示そうとするものである（文責：日本銀行金融研究所）。

討議の模様（文中敬称略）

（藩札の発行理由としての通貨不足の意味をめぐって）

藩札の発行理由については、これまでのところ、藩の財政要因が重視される一方で、通貨不足はそれほど大きな要因ではないとされることが多かった。この点に関して**鹿野**は、報告論文のなかで、「幕藩体制下の貯蓄・投資バランスから考えると、藩財政の窮乏化と通貨不足は同じコインを表と裏からみたもの」として、藩札発行要因としての通貨不足の重要性を指摘した。これに対し、**宮本**からは、「藩札発行の要因を貯蓄・投資バランスから議論するというアプローチは興味深い」としつつも、「より重要なのは、なぜ幕府正貨の地方領国への流入が細り、通貨不足に陥ったのかということではないか」とのコメントがあった。また、**石井**からは、「通貨

不足は、藩財政の状態とは無関係に民間部門における貯蓄不足を主因としても起こりうるため、もっと幅広い検討が必要」との指摘があったほか、**岩橋**からは、「但馬出石藩では、江戸中期に入って商品経済の発達に伴い小額通貨が相対的に不足したことへの対応措置として、1匁札や5分札といった小額面の銀札が大量に発行された」という具体的な事例が紹介された。このように、事後的にみた場合には財政逼迫と通貨不足が同時に発生している可能性は報告論文にあるとおり否定しえないが、財政逼迫と通貨不足との間の因果関係については別途検討する必要があることが明らかにされた。

鹿野はまた報告論文において、藩札発行の第1号は寛文元年〔1661〕の越前福井藩札であるとするのが通説ではあるが、委託研究報告においては、現物は発見されていないものの、熊本、広島両藩の史料からも寛永7年〔1630〕の備後福山藩札の発行が確認されたとした後、東日本地域に比べ西日本地域で相対的に藩札発行が多かったのは、先進経済地域でしかも銀遣いの西日本地域では、大量の銀貨の海外流出もあって、通貨不足の影響がより強く作用していたことを背景としたものと考えられないかと論じた。さらに**鹿野**は、東北地方では、経済発展は西日本に比べ遅れをとっていた一方、いわゆる領国銀貨が元禄期まで流通しており、これが通貨供給を下支えしていたという点にも留意する必要があるのではないかという仮説を提示した。こうした論点に関しては、**田代**より、「藩札を初めて発行したのが寛永7年の福山藩であることが事実によ、それを銀の大量流出に伴う通貨不足と絡めて説明しようとするのは実態と合わない。史実として銀の海外流出がとくに顕著になったのは、1660年以降のことである」との批判があった。

いずれにせよ、各藩における藩札の発行事由の分析に際しては、**田代**が指摘したように、「幕府正貨の普及状況、各藩における有力な藩外向け特産輸出品の有無や財政などの状況、民間レベルでの通貨の過不足等、幕府・藩・民それぞれの論理ないし事情を子細に検討する必要がある」という点で概ね一致した。

（幕府の貨幣高権と私札・藩札との関係をめぐって）

鹿野は、委託研究での研究成果に基づき、「藩札は当初、窮乏化した藩財政を補填するための財政貨幣として発行されたが、正貨保証のない藩札の価値が大きく下落したり、札騒動（一種の取り付け）に見舞われたことから、その後は、各藩とも十分な兌換準備の確保のほか、有力商人の信用を利用するなどして藩札の流通性維持に努めていた」と主張した。こうした藩札の発展形態に関する考え方に対し、**鶴見**は、「私札から藩札へと発展を遂げた」（作道洋太郎氏）とする通説をさらに細分化のうえ、私札→公的性格の強い（すなわち強制通用力のある）藩札→私的性格の強い（すなわち兌換可能で、商人等の信用力が付与された）藩札、というところえ方をしているように読めるとして、報告に対し次のようなコメントを行った。第1に、仮にそうであるとすれば、明治維新後の紙幣発行の歴史、すなわち藩札を念頭に置きつつ発行された太政官札→全国レベルで発行された政府紙幣である国立銀行券→政府とは一線を画した組織である日本銀行を設立して発行された日本銀行券、とい

う通貨史とのアナロジーをみることができ、非常に興味深い。第2に、その一方で、藩札は兌換可能性や札元となった有力商人等による高い信用力を背景に流通しえたとした場合、藩札の持つ信用力と政府貨幣としての強制通用力との関連を明らかにする必要がある。

こうした藩札の発展に伴う性格の変容に関連して、宮本からは、「例えば、幕府の貨幣高権が確立する過程で旧来の領国通貨が消滅し、その後の通貨不足等を補うかたちで藩札が発行された、あるいは領国通貨廃止に対する代償として藩札発行が容認された、と段階的に整理するならば、筋書きとしては極めてわかりやすいが、話を単純化しすぎているきらいがある。むしろ、幕府の貨幣高権が確立した後においても領国通貨は残存し続け、そうした領国通貨の系譜に属する通貨として藩札が発行された、と考えるほうが現実に近いように思われる」との指摘があった。そしてまた、伊藤からは、宮本の議論を敷衍するかたちで、「いわゆる三貨制度がほぼ確立していた江戸中期以降ならまだしも、公鑄貨幣の普及が広範化する以前の、領国銀貨や渡来銭がなお通用していた江戸時代初期に、通貨不足だけを理由に藩札が発行されたというのは理解しがたい。むしろ、幕藩体制が確立する過程にあつては、中央政府が貨幣高権を地方から奪おうとしたことへの対抗措置として、あるいは幕府による貨幣高権の独占に対する各藩のリアクションとして、藩札が発行されたと考えたほうがよいのではないか」との意見が述べられた。これらの議論は、藩札発行を幕藩体制が固まる以前における幕府と藩との間の貨幣高権をめぐる「せめぎ合い」のなかでとらえることの重要性を示唆しており、「私札から藩札への発展過程については、幕府による貨幣高権の確立過程とも絡めて今一度検討する必要がある」（伊藤）との認識が高まった。

また宮本からは、「金融研究所報告は、幕府の貨幣政策と藩札発行との関連について問題提起したところに特色があるといえる。しかし、藩札の発行・流通が幕府による貨幣政策の有効性（改鑄による出目の獲得）に対しどのような影響を与えたかについては、さらなる検討を加える必要がある。すなわち、CrawcourとYamamuraの研究*によれば、幕府の貨幣政策の有効性は、一般には供給した通貨が市場において需要されることによって初めて現れる。そして、天保年間以降は、貨幣が市場においてsaturateしたために、貨幣政策の有効性が低下したとされている。この説を援用しつつ、藩札流通の実態が幕府の数次に及ぶ貨幣政策にどのような影響を与えてきたか、といった分析の切り口も考えられよう」とのコメントがあった。さらに岩橋からは、「藩札発行が盛んとなったり、藩札流通が比較的円滑であったのは物価上昇期である場合が多い一方、享保期のようなデフレ期にはほとんどの藩において藩札は流通力を欠く事態に陥っている。こうした物価動向と藩札の流通力との関係についても、さらに踏み込んで検討する必要があるのではないか」との指摘があった。

* Crawcour, E. S. and K. Yamamura, "The Tokugawa Monetary System : 1787-1868," Economic Development and Cultural Change, Vol.18, No. 4, 1972.

(藩札の流通価値と正貨との関係をめぐって)

金融研究所報告論文においては、委託研究成果に基づき、藩札のみが流通する専一流通、藩札と正貨とも利用可能な混合流通という藩札の流通形態にかかわらず、交換手段としての藩札はその時々々の流通価値にしたがって授受されていたとされた。こうした論点についても、次のとおり活発な議論が交わされた。まず岩橋からは、通貨流通の実態に関して、「従来の財政史的なアプローチ（諸藩の経済政策の面から藩札発行をとらえる）ではなく、生活史的な通貨流通の実態という視角の重要性を説いた点で、金融研究所の報告は意義がある。さらに今後は、江戸の金遣い・上方の銀遣いという単純な二分法ではなく、銭遣い地域の存在をも含めた各地域における通貨の流通実態を、武士や庶民等いわば通貨のユーザーの立場から詳細にみたうえで、藩札をどう位置づけるかといった問題についても検討する必要がある」とのコメントが寄せられた。また霧見からは、「報告論文のように、『江戸期からの紙幣使用の伝統ないし慣行があったために、明治維新以降に発行された日本銀行券もスムーズに流通しえた』という結論は、現段階ではとりあえず留保しておきたい。こうした明治以降の通貨問題、とくになぜ紙幣が受容されたかなどの問題について、より深く理解するためにも、江戸期における経済取引の種類と決済手段を詳細に分析するなど、通貨の流通実態をより掘り下げて検討したうえで、明治期の通貨問題へとつなげていく努力が必要であろう」との指摘があった。

次いで宮本より、「藩札には表面価値のほかに、市場流通価値があったとした場合、藩札と正貨との交換比率はflexibleに変動したのか、すなわち藩札は市場価値で正貨と交換できたのか。仮にそうでないとすれば、藩札発行は地域間の交易等、実体経済取引になにがしかの影響を及ぼしたと考えられる」という問題が提起された。これに対し鹿野は、「藩札の流通価値について触れた委託研究は少なかった。しかしながら、名古屋藩札に関しては、藩札を正貨に引き替えるに際して引替打歩銀の徴収というかたちで市場での流通価値に対応した価値調整を行っていたことが明らかになっている。各藩においても、藩札の兌換により損失を被ることがないよう、その流通価値を参考にしつつ藩札の引替金額を調整していたと考えられるのではないか」とした。

このほか、「報告で強調されていた節度ある藩札発行の重要性は理解するが、その場合の『節度』とは具体的に何を指すのか。また、各藩はどういった指標に基づいて藩札の過剰あるいは不足を判断のうえ、藩札の発行量を管理していたのだろうか」（宮本）、また「混合流通を選択した諸藩の場合、藩当局は藩札の流通価値をどういったメルクマールでとらえていたのでしょうか。いわゆる『銀目の空位化』以降、とくに西日本地域における銀札の実態価値は何に基づいていたのか」（岩橋）といった疑問が寄せられた。

このような藩札の流通価値の判断基準としては従来、宮本が指摘していたように、作道洋太郎氏が『日本貨幣金融史の研究』のなかで紹介した三好庸札の考え方、すなわち自藩と近隣他藩との物価水準の比較をメルクマールとして発行量を調節するのが望ましいとされていた。この三好庸札の議論を敷衍するかたちで、鹿野は、

「幕藩体制下の領国経済をsmall open economyとしてとらえると、諸藩における各種の財物価格は、大坂市場で決定された価格を基準として運送コスト等を勘案のうえ決定されると考えられるため、例えば米の価格が近隣他藩のそれを大きく上回れば、藩札が過剰に発行されたことがわかるのではないか」とした。さらに**鹿野**は、藩札の流通価値を判断しうる指標として、①将来における藩の純歳入（すなわち、藩士に給付しなければならない知行米を除くネット・ベースでの実収石高の割引現在価値）あるいは大坂回米高との対比でみた藩札発行量の多寡、②混合流通の場合には、藩札の交換価値と正貨との乖離度合い、といったものを挙げた。

この間、「銀目の空位化」以降の銀札と正貨の交換に関しては、「銀札に表示された秤量銀貨ではなく、銀札の価値をその時々金銀相場に基づき金貨価値に換算したうえで、計数銀貨で支払いが行われていたものと推察される」（**鹿野**）との説明があった。

（藩札の正貨支払い約束をめぐる）

次いで**齊藤**からは、「藩札と正貨との交換について考えるに際しては、それが藩にとって義務であったのか、あるいは政策として弾力的に応じる余地があったのかを区別しなければならないという観点からすると、次の2点を明確にする必要がある」とのコメントがあった。第1に、専一流通の場合、藩外との取引に限り藩札は正貨と交換されたとされているが、諸藩は兌換請求に応じて義務的に正貨との交換に応じたのか、あるいは政策としてケースバイケースで対応したのか。第2に、混合流通の場合、藩外のみならず藩内においても正貨との交換は要請に応じて無制限に行われていたのかどうか。

これらの問題については、**鹿野**から以下のような回答があった。すなわち、専一流通の場合には、藩は正貨回収の見返りとして藩札を発行していたという経緯もあって、領民が藩外へ出る際に必要となる正貨への交換については確約どおり実施されていた。また藩外からの来訪者に対しては、優先的に正貨兌換を行うよう努めていた。万一藩外の商人から藩札に対する信用を失うことになれば、商人が自藩との取引を避けるようになる結果、自藩への物資の流入が滞り、領内経済に悪影響が及ぶことが懸念されるからである。一方、混合流通の場合、領民からの要求があり次第、正貨との交換に応じていたと考えられる。もしそうでなければ、正貨へのシフトが起これば、藩札が需要されなくなるとか藩札の価値が下落するといった弊害が生じるからである。このため藩政府は、藩札の流通価値が額面価値にほぼ等しくなるよう、常に腐心せねばならなかったといえよう。

（藩札という紙幣が受容された背景をめぐる）

このほか、金・銀貨という幕府貨幣に代えて藩札という紙幣がなぜ交換手段として容易に受け入れられていったのかとか、国際比較からみた藩札の特徴をめぐることも、次のとおり活発に議論された。例えば**田代**は、「一般庶民が紙幣を交換手段として受け取るに際して、当初はかなりの抵抗感というか、ある種のショックがあっ

たとえても不思議ではない。金・銀貨という幕府貨幣の代わりに、なぜ紙という新しい素材が通貨として一般庶民に馴染んでいったのだろうか。これはひとつの大きな謎であり、藩札の性格と意義を明らかにするためには、そうした観点からの検討も必要」という問題を提起した。また**霧見**からは、諸外国における紙幣発行と比較すると、「フランス革命時のアッシニア紙幣やアメリカのグリーンバック等、欧米諸国における紙幣は、戦時期に政府によって発行されるとともに、その後、大幅な価値下落を余儀なくされているのが一般的であるのに対し、わが国の場合、藩札は平時に発行され、概ね順調に流通しているといえよう。なぜ日本においてのみ平時に紙幣が発行されたのか。日本だけが世界のなかで何らかの特殊性を持つのか。これらの諸点についても検討を要するのではないか」とのコメントがあった。

こうした問題提起に関しては、「江戸時代には金銀を紙で包装した包金銀がそのまま流通していたことから明らかなように、信用取引が活発に行われており、それが紙券貨幣の受容性を支えたと考えられるが、このほか貨幣素材としての紙が丈夫で破れにくかったという技術的要因も無視することができないのではないか。つまり、日本が優れた紙の文化を持っていたところに藩札流通の鍵を見出すことができのだろうか」(**齊藤**)とか、「わが国には印刷技術が7～8世紀頃に中国から輸入されるなど、印刷技術が早くから確立・発展していたことも、藩札の流通に対し重要な役割を果たしたのではないか。紙幣に対する認証性を高める一方、偽造を防止するうえで大きく寄与したと考えられるからである」(**鹿野**)などといった指摘があった。

このほか**石井**からは、「報告論文では、日本はヨーロッパとは異なり、民間の銀行制度が発達しないなかで、私札的な性格の強い藩札が発行されたと述べられていたように思うが、そうした理解は適切か」という疑問が投げかけられた。これに対しては、「そもそもこの問題は、銀行の定義如何によるとは思うが、個人的には、日本において銀行が発達していなかったとは断言できないと思う。なぜなら両替商がいわゆる銀行的な商売を行っていたからである。むしろ日本では、信用システムが成長する過程で、各藩が私札的な性格を残したものとして藩札を発行していたと理解したほうがよい。この場合、藩札は、信用取引手段が銀行券、小切手、為替手形などさまざまな形態に分化していく前段階において、多義的な機能を果たしていたといえるのではないか。いずれにせよ、この問題は、信用システムの担い手である両替商の機能について再検討することにより、より明確になるものと思われる」(**霧見**)とか、「節季払い等の信用取引はいつ頃から発展してきたのであろうか。討論の際に採り上げられた紙幣の受容性の問題も、実はこうした信用取引の発展と深く関わっているように思われる」(**鹿野**)などといったかたちで、信用制度、とくに両替商の機能について、あらためて詳細に分析することの必要性が確認された。

(今後の検討課題)

最後に、以上のような江戸時代における藩札をめぐる議論を総括するかたちで、金融研究所より、「中世から近世、近世から近代への連続性・非連続性の問題をさらに掘り下げて分析するためにも、通貨制度や決済システムといった切り口から歴史をとらえ直すことの重要性があらためて痛感された。こうした問題について、諸先生方のお力添えをえつつ、今後とも鋭意研究を続けて参りたい」とのコメントがあった。